環境保全のボランティア体験講座 2026　第5回講座レポート

第5回目の講座は、9 月 13 日（日）に大阪府最北端にある能勢町で開催しました。
この日の受講生は 16 名、それに昨年の受講修了生（フィールドネーム：いぬいっと）が 1 名スタッフとして参加してくれました。
弊社テナントビルの 1 階フロアでいぬいっとさん補助のもと、受付や資料の配布を行い、今日の活動時の進行用に班分けを行いました。



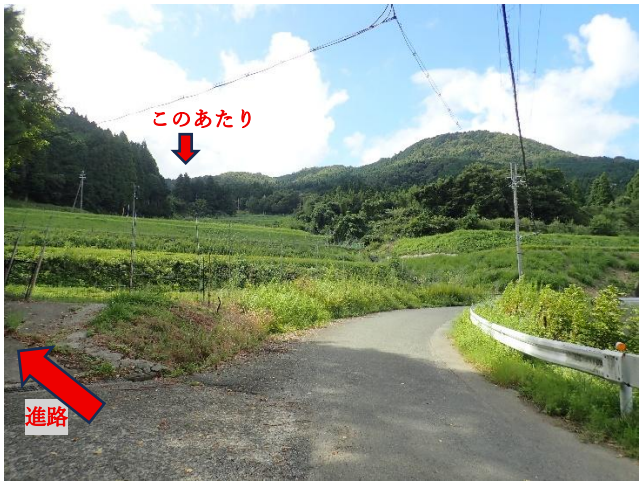


そしていぬいっとさんの紹介や、進行の流れの説明を一通り終え、貸切バスに乗り込みました。





活動地近くのバス停車位置に到着した一行は、下の写真正面にそびえる「三草山」の山麓にあるボランティア団体の活動拠点（矢印の先）の東屋まで、坂道を 15 分ほど歩きました。
連日雨などでこの日も心配していましたが、活動にはちょうど良い曇り空で暑さを感じにくい気候でした。
また、三草山向かって右手側の山麓は**長谷**（ながたに）という地域ですが、そこに広がる棚田は「ガマ」と呼ばれる石組みの給排水設備が特徴的な斜面となっており、伝統文化の継承に力を入れています。そのことが評価され、農林水産省が優良な棚田を認定するため創設した「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に選定されているような地域で景観も素晴らしい場所です。

栗が大きくなっている姿が見られました。
その横の伸びる少し傾斜の険しい路面を、目的地である活動拠点まで歩き進めます。




予定より 30 分も早く活動拠点に到着したので荷物を置いて少し休憩時間としました。
受講生たちは、この時既にこの空間にいる様々な生きものの存在に気付き、思いおもいの動きをしているのが見られました。




少し予定を早め、「能勢みどりすとクラブ」の上野さん（赤い帽子の方）より、ボランティア会員さんのご紹介や、三草山の自然と保全についての簡単な説明がありました。
「あとは現地で説明します！」これがまさにフィールドミュージアムといったところでしょうか。





午前中はまず三草山の自然を知る為に、以下の図面にある歩道を拠点から歩いて視察します。
上野さんのお話の後、ため池の姿を左に捉えながら山道を奥に進んでいきます（写真右下）。



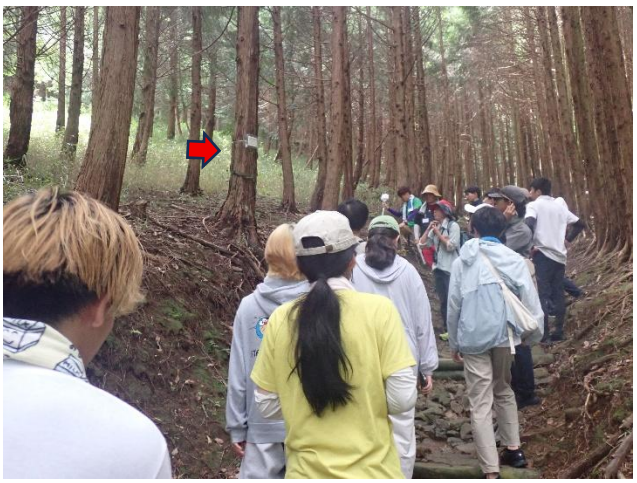


写真からも少し傾斜が急なのが分かりますね（写真左下）。
右下の写真は、足下にシデムシの仲間を見つけそれに注目のゆく受講生の様子で、種類の同定をしているのは、いぬいっとさんです。



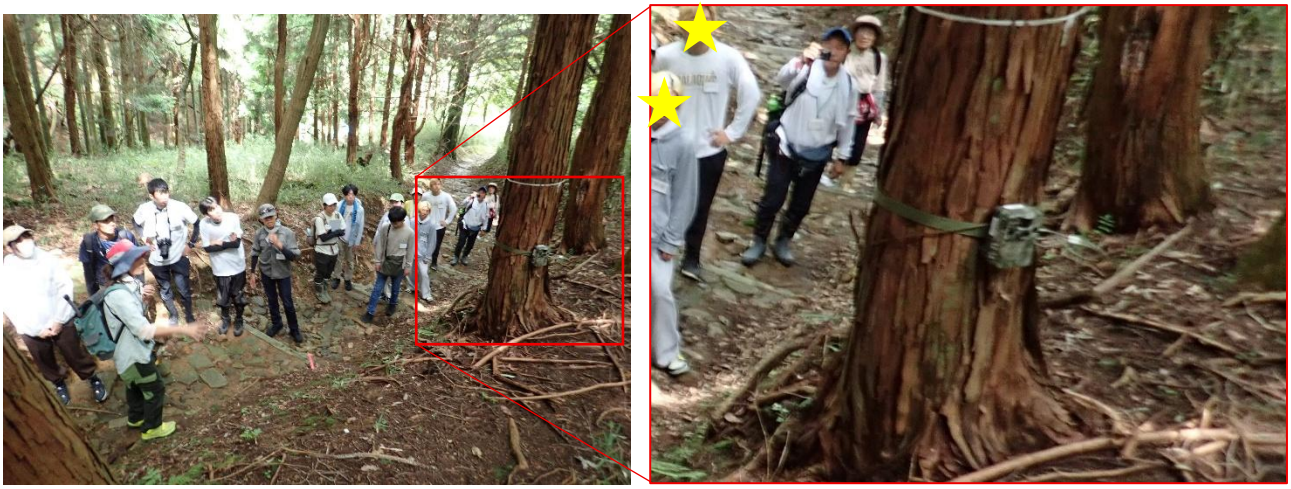


針葉樹が広がるこのポイントにはトレイルカメラと案内看板が設置されています（矢印の木）。トレイルカメラとは、狩猟や野生動物の生態調査で使われてきた道具で、野外に設置し、動物や人の接近を検知して自動で撮影する配線のいらないカメラのことです。





上野さんが設置理由などを解説されました。
またお昼の休憩時に、ここの撮影データを見る時間がありますので、後ほど少しご紹介します。

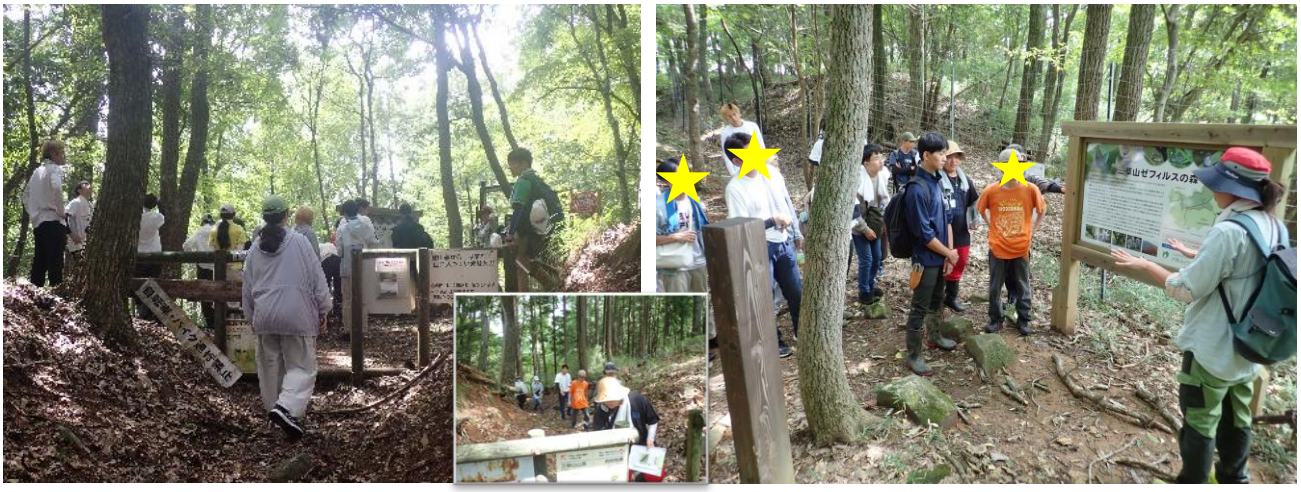


下の写真は、ここ北摂地方に多い「台場クヌギ」と呼ばれる炭焼き文化を象徴する、特徴的な形をしたクヌギの木を説明している様子です。地上から 1.5m程度のところで切ることにより、その切り口付近から萌芽するので独特のスタイルになるのですが、近年炭焼き文化の衰退によりこういった木は年々少なくなってきています。





更に登っていくと平成 4 年から緑地環境保全地域且つ野生動植物保護地区に指定されたゼフィルスの森に到着しました。ゼフィルスとは、ミドリシジミチョウの仲間の世界共通の学名で、全国に 25 種類いるゼフィルスのうちこの森には 10 種類が確認されている貴重な場所となっています。



ここには一昨年度の講座の時以降に、防鹿柵設置によりフェンスが張り巡らされているほか、左下の写真にある矢印の部分ように門も設置されています。実はフェンスの設置には、一昨年度以前の当講座の受講修了生らも、複数人が参加していました。





フェンスの途中にある門をくぐると、中には更にネットで囲われた箇所がありました。エノキなどの樹木を植栽しており、それを保護しています。







更に登ると、眺望のいい丘の上にある行燈岩というスポットに出て、その名の由来を上野さんが説明されました。奥のほうには大阪平野が見渡せますが、数年前に高木を伐採して整備した時から木がまた少し大きくなっているため、下の方が見えにくい雰囲気です。それでも、「京セラドーム大阪が見えるんですよ」といった上野さんの紹介に、受講生は目線を向けていました。





写真中央にそびえるのはナラガシワの大木です。ナラガシワが樹林を形成しているのは珍しいのですが、この地域ではその景観を見ることができ、そのことを上野さんが説明している様子です。





左の写真にある看板は、三草山ゼフィルスの森での動植物の採取の禁止を啓発するものです。緑地環境保全地域且つ野生動植物保護地区に指定されていると少し前にご説明しましたが、違反すると大阪府自然環境保全条例により罰せられます。

上野さんから「ナラガシワ」と、柏餅を包む「カシワ」の葉の見分け方の説明がありました。カシワの葉柄（所謂付け根の軸）の方が極めて短いという違いがあります（写真下）。





早速いぬいっとさんがオオカマキリ（写真左下）を、受講生がニホンカナヘビ（写真右下）を捕まえて観察が始まりました。皆さん捕まえるのがうまいです！





上野さんの後方に生えているのは、北アメリカ原産ダンドボロギク（学名：*Erechtites hieracifolia*）です。1933 年に愛知県段戸山で初めて記録され、注目されたことからこの和名が付けられたとされています。土砂崩れの跡地のような新しくできた日当たりのよい場所に、他の植物よりも早くに侵入するという厄介な外来種です。後ほどまさにその場所に遭遇しますのでまたご紹介します。







次の場所に移動です（写真左）。我々は門をくぐってフェンスの内側に入ってきたのでこの場所は内側ですが、フェンス沿いに道が伸びているので、そこを登っていきます。反対側の地面には、「フェンスを飛び越えてこちら側にきたくて、それに沿うように歩き回りながら草を食べた跡がある」ということで、説明がありました。

こちらは境界線について説明している様子です。山の中では、標識杭によって境目が表現されているという話をされました。この杭は端が青色ですが、他にも赤や黄、緑といった色もあり、様々な意味合いの違いで使い分けることも可能です。







下の写真は近くで発見したカエンタケです。名前の通り燃え盛る炎（火炎）のような形と色をしており、触れるのも危険なほど極めて強力な毒を持つ毒キノコです。触らないようにと受講生への注意がありました。







その他にも、様々なキノコが生えていました。キノコは似た種類が多く、間違って食べたら危険なのでしないようアドバイスがありました。

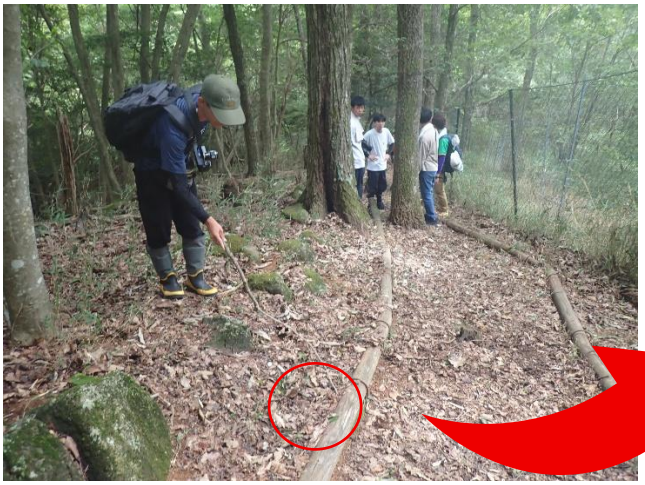






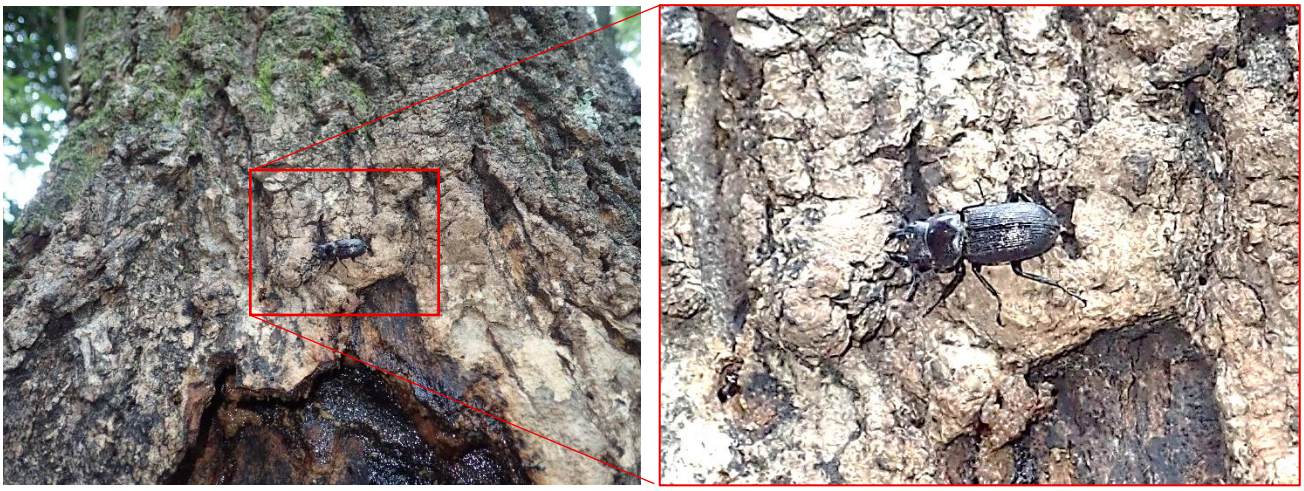
そのほか、散策途中には左の写真のように樹木についた傷も見られました。上野さんは、恐らくシカやイノシシによるものとご説明されました。

左下の写真は、マムシを枝でつつく、いぬいっとさん。実はこの歩道の横を数名が通り過ぎた頃にマムシの存在に気付きました。あちら側も動かなかったのは、見つかりたくなかったのだと思われますが、すぐにでも飛び掛かれるような姿勢をしています。尚、刺激する場合は他の受講生を離れさせてから行うよう、いぬいっとさんにお伝えしてからの写真の状態となります。





下の写真はスジクワガタのオスで、少し標高の高めの山に多い種類なのですが、ブナが生えるような高山にまで生息しています。
コクワガタに似ますが、オスメスともに上翅に複数の並列した筋があるのが、大きな特徴の違いです。





先程お示しした図面中の「看板」～「行燈岩」の北側をぐるっと一周して門のところまで戻ってきました。次はもう一度門をくぐって内側に入り、「看板」の南側へ下ってから東側に進んで、途中で萌芽（ほうが）更新について学びます。





下の写真は、萌芽更新についての説明をしている様子です。鹿柵で囲まれた場所で1ｍ程度の高さに切られたクヌギから徒長枝（とちょうし）が伸びているのが確認できます（矢印）。この森林・樹木を更新する仕組みの事を萌芽更新といいます。



上の写真の場所の周辺では、鹿柵が設置されている場所と設置されていない場所を比較することができました。鹿柵のない場所では、鹿に新芽を食べられたことで木が枯れてしまっている様子も見られ、受講生たちは、鹿による食害が森林の植生に及ぼす影響を実際に確認することができました。昔と比べ、近年は鹿の増加によるこうした森林管理上の問題が深刻化しており、その現状を実際に目にすることで、受講生たちは問題を肌で感じ取ることができました。

行燈岩のあたりでご紹介したダンドボロギクですが、進行方向右手の斜面に大量に見えてきました。「土砂崩れの跡地のような新しくできた日当たりのよい場所に、他の植物よりも早くに侵入する」と説明した通り、開けた土地に真っ先に群生してしまったようです。
実はここはプロットというものを張って植生調査をするための場所でもあったのですが、画像のようにダンドボロギクー色になってしまったようです。





堆肥を作っている場所をご紹介いただきました。作成当初はカブトムシがたくさん繁殖するかと考えていたそうですが、周辺の土壌はここの環境とさほど変わらなく良好なので、特別にカブトムシに利用されるといったことがないようです。




右の写真は、道路脇がダンドボロギクによって一面に覆われた道を下っている様子です。この植物は、若い葉が食用にもなるとされています。一方で、伐採や土砂災害などによって開けた空間ができると、旺盛な繁殖力でいち早く侵入し、短期間で一面を覆うほどの大群落を形成することがあります。日本の在来植物が生育する環境にも影響を及ぼすことがあるため、外来植物として注意が必要です。





この場所では、こちらも国外外来種であるヨウシュヤマゴボウが繁茂した年もあり、年によってどちらがニッチを奪えるかのせめぎあいが外来種同士で続いています。
今回は時間の都合で念入りな駆除は行わず、下の写真のように通過時に踏み倒す程度の処理で済ませました。

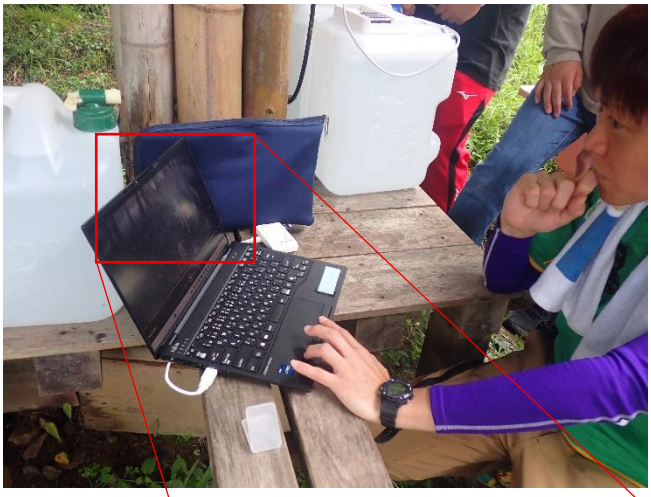
さて、拠点の東屋に戻ってきて昼食の時間ですが、その時に次回の講座前に知っておくべき内容の案内なども行いましたので、その様子です。





休憩時間の後半には、午前中に山林内で説明のあったトレイルカメラの映像を見られるように、用意していたパソコンを開きました。







ご用意いただいたメモリーにはかなり沢山の映像データが入っており、シカやテンといった種類がセンサーによって複数回撮影されているのが見られ（写真右）、そのことにより、受講生はこの地の哺乳類の存在を実感することができました。

休憩時間にサプライズでかき氷が振る舞われました。
以下の写真は、楽しそうに写真に写る受講生たちの姿です。













右の写真は、余った大きな氷の板を口にほおばる受講生





まずはまだ2班が纏まっている間に、拠点にある機材の使用方法を学びました。
下の写真は油圧による薪割り機を操作している様子で、レバーを下げると油圧でバーが移動、その先にある三角に尖った金属部に薪が押されていき、結果薪が真っ二つに割れる仕組みです。
はじめて見る機械と、ジワジワと確実に割れる薪に、受講生の視線が集まっていました。




下の写真は、金属枠に立てかけた薪をカケヤ（ハンマー）で打ち付け、中にある金属の突起状の歯に当たった薪が、衝撃で半分に割れていく仕組みを教わっている様子です。
また、それら道具を使うときの姿勢や腰の入れ方も学ぶことができました（写真右端）。





さて、午後からは下の図のように2班に別れての活動が始まります。
（※出席者の少なかったＢ班がＡ班とＣ班に分かれています）

A班	C班
稲刈り	薪割り
↓	↓
台場クヌギ見学	稲刈り
↓	↓
炭窯見学	台場クヌギ見学
↓	↓
薪割り	炭窯見学

A 班

A 班は活動地の坂を下り、下段にある田んぼに移動しました。写真は、田んぼに到着して稲刈りの手法をお聞きしている様子です。農薬使用のかなり少ない田んぼとのことで、稲穂のボリュームが少ないのが印象的でした。品種はヒノヒカリとなります。



刈った稲穂を藁で束ねて括るための方法を教わっている様子です。



早速作業開始です！端から順に進めていきます。



C 班

早速、そのまま薪割りに挑んだ C 班の様子を見ていきましょう。まず、薪割り用の丸太を作業場まで移動させるので一輪車に乗せていきます。



この丸太、3 年前にこの場で倒れたクヌギの大木を切断したものですが、2 本だけでも積載重量がかなり重いですし地面が自然の地形なので運ぶ時も大変です。



電源コードの引ける東屋の前が作業場となりました。C 班のメンバーで協力し合いながら必要数を運び出しました。



A 班

皆が作業中、その田んぼの脇では、いぬいっとさんが胴長（ウェーダー）を着用して網で何やら活動中です。
近づいてみると・・・



生物採集をしていました。
班ごとの一連の活動のあと、皆が拠点の東屋に戻った時にいぬいっとさんが講師の生きもの観察会を行うので、その時間までに生物採集を依頼していたのです。

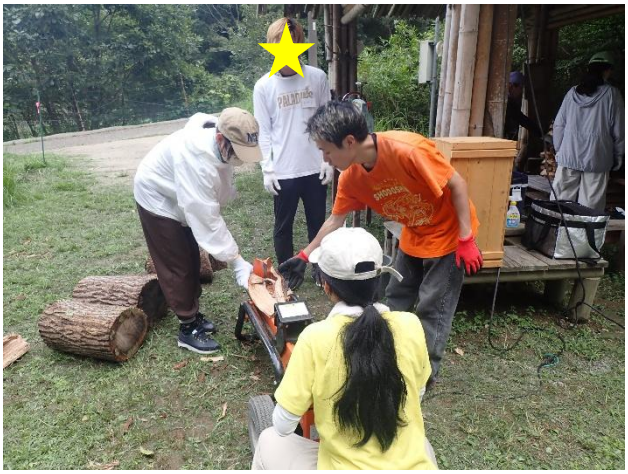


既にこの中に数種類入っていました。後ほど観察会の様子の時に、またご紹介します。



C 班

油圧による薪割り機は、機械についているレバーを押し下げるとゆっくり動作するので、作業者は薪割りをするにあたり安全に作業を進めることができました。



ハンマーを使って金枠にある歯にまずは木を食い込ませます。すべての活動時には、道具が滑り落ちないように全員ラバー付きの軍手を装着しています。



カケヤという木でできた重いハンマーを使って衝撃を与えて割っていく様子です。この道具はなかなか重たく、うまく振り下ろして打ち付けるのが少し難しいようです。



A 班

刈り取った稲穂はΦ8～10 ㎝程度の「ちょうどいい量」に束ねていき、切り口をトントンと叩いて、位置を合わせていきます。縛る時の藁も、習った結び方で括って稲を纏めていきます。





手前から刈り取って少しずつ前進しているので、手前のスペースが広くなってきていますね。そろそろ時間なので、この後の作業は後半の C 班に託します。



C 班

皆さん交代しながら一通り経験していきます。





こちらはボランティアの方にカケヤの木の棒を使って振り下ろし方を学んでいる様子です。剣道の竹刀のように振り下ろします。楽しく練習ができました。



A 班

稲穂を干す昔ながらの「稲架（はさ)掛け」をするための「稲木」の設置は、後半に稲刈りを行うC班が担当しますが、その部分は要領だけ教わりました。



ボランティアの方が赤米(矢印先)を持ってきてくれました。見た目がカラフルなので飾っても良し、食べても良し。ということで欲しい受講生が持って帰れるように、少し特殊加工して長細くした花袋を使用しました。



次のアクティビティ「炭釜見学」に移る時、薪割りの終わったC班とすれ違った時の様子です。こちらの班員が手に持っている稲穂を眺めていたようです。



C 班

C班は活動地の坂を下り、下段にある田んぼに移動しました。写真は、田んぼに到着して能勢みどりすとクラブ代表の足立さん（左端）から稲刈りの手法をお聞きしている様子です。



稲穂を束ねた後の藁での括り方です。強めに縛ることがポイントで、これが緩いと稲木にかけた時にスルスルと抜けてしまい、場合によっては最終的にバラバラになってしまいます。



括った稲穂を一旦並べていきます。



A 班

炭釜見学の様子です。なかなか見慣れない光景に皆さん興味津々です。詳細については後ほどＣ班の炭窯見学のところでご紹介します。



拠点に戻ってきました。Ｃ班が割った薪が積まれていて、列が1つ増えているのが目に留まりました。赤丸印のところが増えた薪です。





さて、早速Ａ班も丸太運びから開始です！地面にタイヤを取られ一度丸太が落下するシーンを目撃しましたが、皆で協力して作業を続けました。



C 班

稲架掛けをするための「稲木」の設置するときの様子です。長い竹を用意し、支柱を立てて準備します



稲木はバランスが大事です！稲穂をかけてから風などで転倒してしまっては大変です。稲木足（3脚）2つと竹を設置した時のバランスを確認しながら安定した位置を探っていきます。





A 班

まずは油圧で薪割りをします！使い方を再確認している様子です。



早速実践開始です。斧を使うとこのクラスの太さの丸太は割るまでにかなりの体力を使いますが、この機械だとレバーを下げるだけ☆ゆっくりと安全に割ることができます。



なんと、油圧の力でも動かなくなるほど固い丸太もありました。そのような丸太は、中心から割ろうとするのではなく、芯を外して外周側から割れが入るように位置を調整しました。すると、丸太は徐々に裂けるように割れていき、無事に処理することができました。



C 班

このように、束ねた稲穂を順番に稲木にかけて、それを端に詰めていきます。これら全て初めての体験に、受講生は楽しみながら学習できました。





少し下がって今日２班が刈り取った田んぼの様子を撮影しました。結構広いですね！



最後は C 班のみんなで記念撮影。いい思い出になりましたね！



A 班

その後も順番に薪割りをしていきます。





割っていく最中、カミキリムシの幼虫が出てきました。恐らく蛹になる前の前蛹と思われます。



C 班

稲刈りが終わり、次のアクティビティ「台場クヌギ見学」へ訪れた C 班の様子です。



この講座の参加者募集チラシの表紙や、今回の講座のしおりのトップを飾ったクヌギです。



圧巻の姿に受講生の中で驚きの表情をしている人もいました。



A 班

カケヤを使ったまき割りも教わりました。ボランティアさんがやり方を丁寧に教えてくださります。



早速交代で体験しました。なかなか楽しいようで、熱中して作業を続ける受講生の姿が見受けられました。





C 班

次に炭窯見学に進みます。猪名川町～能勢町～高槻市あたりにかけて北摂地方と呼ばれるこの地域は、その昔、池田炭（菊炭）と呼ばれる木炭の生産や流通で有名な場所でした。菊炭はお殿様への献上品として納められていたそうで、その見た目が菊の花のように美しいこと、茶の湯を沸かすのに最適な温度で燃焼することから、茶席に使われていたようです。上野さん曰く、台場クヌギから切り出した原木を山の下に運ぶより、炭にしてから山を下った方が軽くて作業効率がいいとのことで、昔は山の上の各地にこういった炭窯が点在していたそうです。







さて、今回のいぬいっとさんによる生きもの観察会に向けて、田んぼのほかにも、拠点近くにあるため池での採集を検討していました。ため池の周囲は植物に覆われていたため、実は画像のように池へ入れるよう、事前に事務局で刈払機を使って進入路の草刈りを行っておきました。





先ほどまでの行程で安全確認や記録作業を行っていた事務局がその作業をしている間に、いぬいっとさんは田んぼでの採集を終え、こちらのため池へ移動して、採集を始めていました。







上の写真のように、既に何やらたくさん水生生物がウヨウヨ・・・

左の写真のように、すくい上げた網の中にも何やらウヨウヨ・・・
また後程ご紹介します。

左下の写真のように、水に浸かっている草の際を狙って網ですくい取ることを、通称「ガサガサ」といいます。こういった場所には様々な種類の生きものが隠れています。
右下の写真は、何かをゲットして見せてくれている、いぬいっとさんです。





近づいてきたその手には池の中心を泳いでいたというミズカマキリの姿がありました。





下の写真は、こちらの池で採集した生きものたちの、採集途中の様子です。



生きもの好きにはたまらない雰囲気が見て取れますね。





皆を集めて東屋で観察会の開始です！白いバットに広げて、たくさんの種類を説明していきます。
ご覧のように講座の先輩が採集した生きものに興味津々でした。

いぬいっとさんから向かって左側のバットには田んぼで見つかった生きものたちが。右側のバットにはため池で見つかった生きものたちが入っています。小さな水生昆虫もいるので近寄って見る受講生もいました（写真下）。





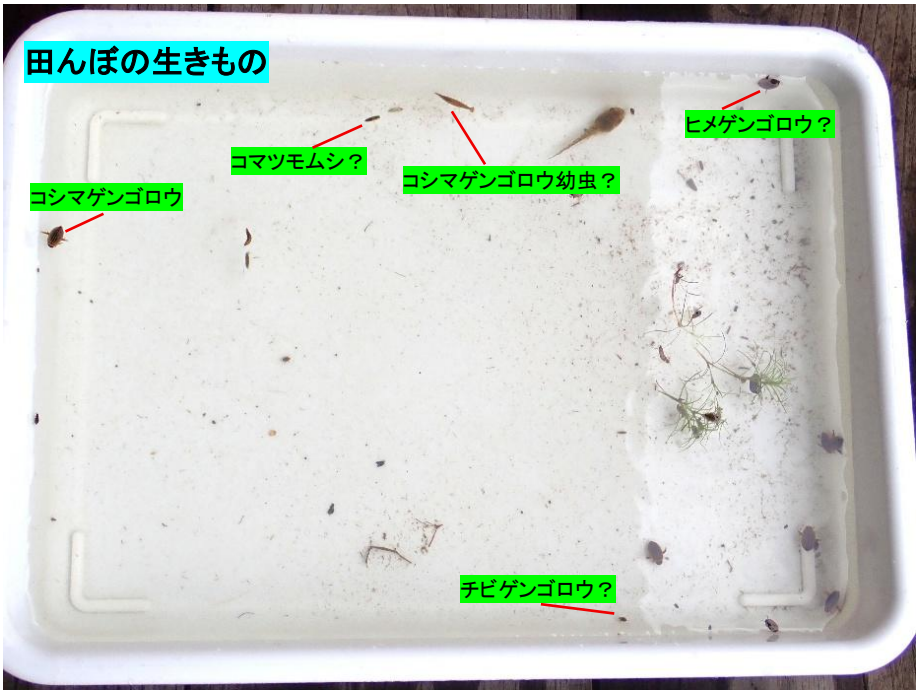
「能勢町のアカハライモリのお腹は他の地域に比べて特に鮮やか」上野さんの発言にピンときたので、飼育ケースにイモリを入れて受講生に見てもらいました。

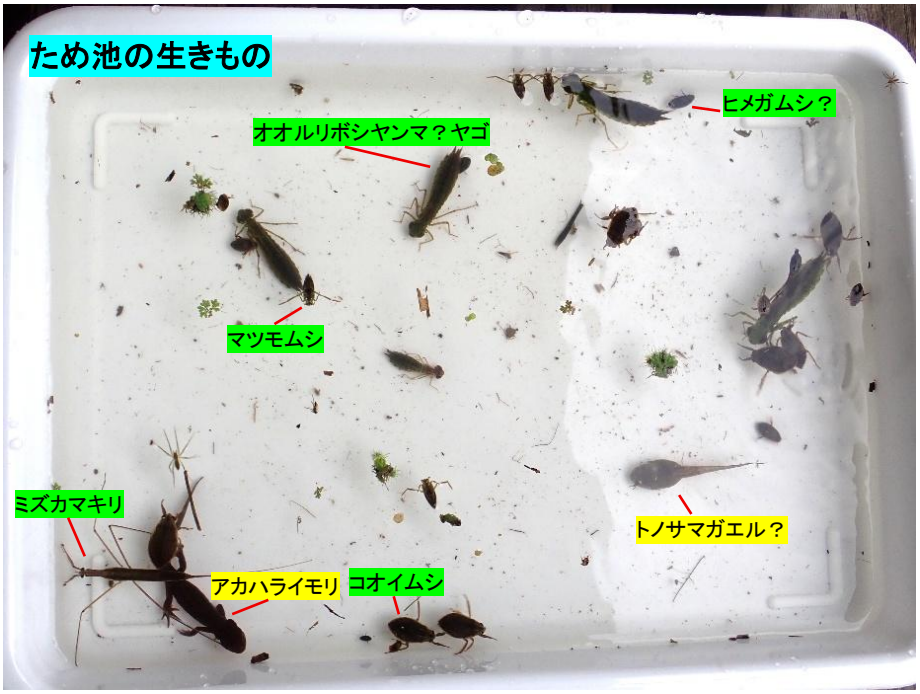




三 草 山 水 生 生 物 大 図 鑑

以下は、いぬいっとさんが見つけた水生昆虫です。受講生が稲刈りをしている間、これだけたくさんの種類を集めていただけました。尚、写真内で「？」がついている種類ありますが、写真の原画を拡大して鑑定しましたが、小さすぎて不鮮明で判別不能などの理由です。また、バットから飛び出て写真に写っていないと思われる種類もありました。





■合計約20種類

コシマゲンゴロウ
小型で水田や湿地などに見られるタイプのゲンゴロウです。

ヒメゲンゴロウ

チビゲンゴロウ
黄褐色～褐色で、3～4 ㎜と小さいため一見するとゲンゴロウ類とは分かりにくいです。

ヒラタガムシ

ゴマフガムシ

ヒメガムシ

マメガムシ

ウキクサゾウムシのなかま

コガシラミズムシ

マルミズムシ

コミズムシのなかま

コマツモムシ

マツモムシ
水中で仰向けになって泳ぐのが最大の特徴です。

ミズカマキリ

コオイムシ
水田や池、湿地などにすむ水生カメムシの仲間で、名前のとおり、オスが卵を背中に背負って育てることで有名です。

カタビロアメンボ

ハネナシアメンボ

オオルリボシヤンマ？
ヤンマ科に属する大型のトンボで、名前のとおり、成熟したオスは鮮やかな青色の斑紋が特徴。付近で成虫が観察されたので恐らくその幼虫かと思われます。

アカハライモリ

トノサマガエル？（未同定）

観察会が終わり、参加者全員で記念撮影を撮ることに。
いい思い出となりました。





同時に、いぬいっとさん（写真右矢印先）には採集した生きものをもとの場所に放流しに行ってもらいました。
しかし次第に雨が強くなり、東屋の下は全員が入るには少し狭いので、またすぐ横のビニルハウスに全員避難しました。的確な判断ができたので、結果、それほど濡れずに済みました。

左の写真は、いつものようにアンケートを記入してもらっている様子です。

…するとポツリポツリと雨が降り出しました。
運営側も雨雲レーダーを見ながらの運営です。
すぐにどうするか判断し、すぐ横の東屋に避難してもらいました（写真下）。



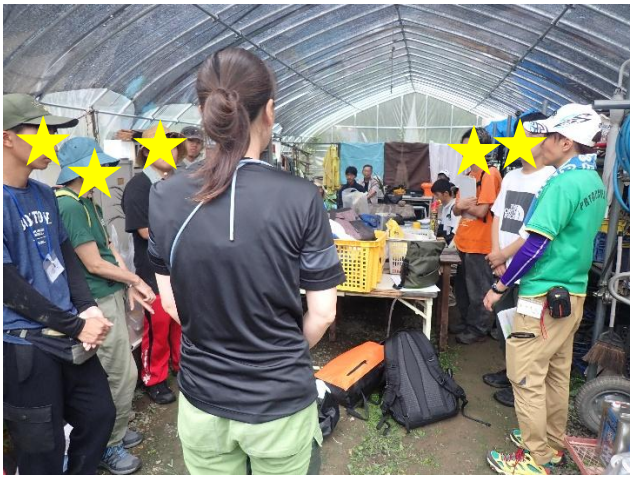
ビニルハウス内でアンケート記入を仕上げてもらった後の、いつものふり返りの様子です。これまで発表歴のない 3 人ほどに発表してもらい、皆で今日学んだことの感想などを共有しました。ここで出た感想の一部は後程ご紹介します。





受講生の感想の後は、いぬいっとさんからも、受講生に向けて労いの言葉を述べてもらいました（写真左下）。大学の同じ部活動の後輩もいる中、修了後の動きも楽しみなシーンとなりました。最後に上野さんにも一言お願いした後（写真右下中央）、ご協力いただけた能勢みどりすとクラブの皆さんにお礼を言って荷物を纏めてビニルハウスを出ました。





去り際に足立さんから、カヤネズミ（世界最小のネズミ）の巣の紹介がありました。名前の由来は「カヤ（萱）のような草の茂った場所に生息するネズミ」となります。





傘をさしている人もいますが、殆ど雨は上がってきました（写真左下）。一斉に山を下っていきます。バス停車位置まではずっと下り道で 15 分ほどなので、帰りは楽な様子でした。
途中に我々が活動した田んぼが見えてきました（写真右下）。手前が2班で刈り取った範囲となります。A 班は、稲架掛け作業をしていないので、この時に見て確認しました。





雨は止んでいました。待機していたバスに乗り込み（写真左下）、そこから 10 分ほどのところにある、地元の特産品などを取り扱う道の駅「能勢（くりの郷）」に立ち寄りました。閉店間際なので、野菜などは例年通り殆ど売り切れていましたが、受講生たちは販売されている菊炭や特産品を見る事ができました。











左の写真のように、何人かの受講生はおみやげを購入するなどして、出発時刻まで思い思いに過ごしていました。

下の写真は展示販売されている能勢の菊炭です。弊社からもコンタクトをとっている、能勢さとやま創造館の商品です。受講生何人かが、興味深そうに見ている様子がありました。





下の写真は、いぬいっとさん（左端）と大学の後輩たちです。仲良く談笑しながら購入した物産を口にしていました。





右の写真は、くりの郷の前を流れる山田川を覗き込む受講生らの姿です。多数のオイカワや恐らくカワムツといった魚を見ることができました。今年度の受講生は魚好きが多いのでこういった環境が気になるようですね。

さて、再度バスに乗り 1 時間ほどで解散場所に到着しました。
最後に、帰宅後にマダニが体についていないか、よく見ておくようにとお伝えし、次回の淀川城北ワンドでの講座開催を楽しみに解散しました。
尚、後日、受講生からのマダニ被害の報告はありませんでした。シカとイノシシとマダニとオオセンチコガネ（いわゆるフンコロガシ）はセットであると以前から講座内でお話をしてきましたが、野生動物の多い地区は、それに依存する昆虫も沢山生息していますので、活動後はこういったことにも注意が必要です。

■受講生の声　～稲刈りや里山の体験から学んだ環境保全～

受講生アンケートの自由記述から、印象的な感想をいくつかご紹介します。今回、特に多く寄せられたのは、稲刈りや薪割りなどの体験を通じて、昔から続く里山の暮らしや文化と自然環境とのつながりを実感したという声です。

・「環境保全で稲刈りと聞き、初めはなぜと思いましたが、里山を守る上で、里山は生活と結びついた場所のため、山の外も含めて環境を保全することが大切だと感じました」

という感想からは、稲刈りという一見すると環境保全とは直接関係がないように思える体験を通して、里山の自然が人の暮らしと深く結びついていることへの理解が深まった様子がうかがえます。

また、

・「昔の人の知恵を取り入れて、田んぼを整備し、生物多様性を守ろうとする工夫が良いと思った。環境保全のためには、人間の手で網を張ったりして、生物バランスを調整することが必要になる」

・「環境保全にも様々な種類があり、どれも継続的な努力が必要だと感じました」

といった声もありました。自然環境は、人の手を加えずにそのままにしておけば守られるとは限らず、地域の自然や生きものの状況に応じた継続的な管理が必要であることを、実際の活動を通して学んでもらえたことが分かります。

さらに、三草山の森林や防鹿柵、休耕田の再生について、

・「三草山におけるゼフィルスをはじめとする管理された森林を必要とする動植物の保全のため、適度な伐採や防鹿柵の設置など、様々な観点からの対応が行われているのだと実感した。また、里地の生態系のつながりを考慮し、休耕田を再生して水田作りを行っている点や、再生前と再生後で確認された生き物の種類が増加したという点に深く関心した」

という感想もありました。

実際に森を歩き、鹿による食害の状況や防鹿柵を見たり、再生された水田や池の生きものを観察したりすることで、森林だけでなく、水田や池などを含めた里地・里山全体のつながりが、生物多様性を支えていることを実感できたのではないでしょうか。

また、稲刈りや薪割りを体験したことで、

・「稲かりやまきわりを実際にやってみて、楽しさを感じたとともに農家さんは日常的にこれらを行っているからとても大変だと思った」

・「まき割りや、いね刈りなど、この辺に住んでいる方々からしたら、あたり前のことだけど、とても大切な文化なので、なくならないでほしいと思った」

という声もありました。普段の生活では経験する機会の少ない作業を実際に体験することで、地域に受け継がれてきた暮らしや文化の価値、そしてそれを支えてきた人々の苦労にも目を向けるきっかけとなったようです。

今回の講座が、自然や生きものについて知るだけでなく、人の暮らしや地域の文化と自然環境とのつながりを考え、環境保全のために人が関わることの意味を学ぶ機会となったことをうれしく思います。

三草山では、森林の適切な管理や防鹿柵の設置、水田の再生など、さまざまな取り組みが行われています。こうした活動は、一度行えば終わるものではなく、地域の自然の変化を見ながら、長く継続していくことが重要です。

今回の「知る」「見る」「体験する」という学びをきっかけに、受講生の皆さんが身近な自然や地域の環境にも目を向け、自然と人との関わりを大切にしながら、これからの環境保全について考えていくことにつながればと思います。